

**IBM InfoSphere DataStage and
QualityStage**
バージョン 8 リリース 7

**アドミニストレーター・
クライアント・ガイド**



**IBM InfoSphere DataStage and
QualityStage**

バージョン 8 リリース 7

**アドミニストレーター・
クライアント・ガイド**



注記

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、41 ページの『特記事項および商標』に記載されている情報をお読みください。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： SC19-3436-00
IBM InfoSphere DataStage and QualityStage
Version 8 Release 7
Administrator Client Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2011.10

© Copyright IBM Corporation 1997, 2011.

目次

第 1 章 アドミニストレーター・クライアントとは?	1
誰がアドミニストレーターを使用できるか?	1
アドミニストレーター・クライアントから実行できることは?	1
第 2 章 アドミニストレーター・クライアントの使用法	3
アドミニストレーター・クライアントの開始	3
アドミニストレーター・クライアントの説明	3
InfoSphere Information Server エンジンでのタイムアウトの設定	4
InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行	4
第 3 章 プロジェクトの管理	7
プロジェクトの追加	7
プロジェクトの削除	8
プロジェクトの移動	8
プロジェクトの移動	9
第 4 章 プロジェクト・プロパティの設定	11
「全般」ページ	12
ディレクター・クライアントでのジョブ管理の有効化	12
パラレル・ジョブのランタイム列伝搬を有効にする	13
内部参照情報の編集の有効化	13
コネクターからのメタデータのインポートの制御	13
プロジェクトのプロテクト	14
環境変数の設定	14
プロジェクト・レベルでのオペレーショナル・メタデータの有効化 (パラレル・ジョブおよびサーバー・ジョブ)	17
「許可」ページ	17
InfoSphere DataStage ユーザー・ロール	18
InfoSphere DataStage ユーザー・ロールの割り当て	19

オペレーターに対するジョブ・ログ・エントリーの表示の変更	19
InfoSphere Information Server エンジンでのトレースの有効化	20
スケジューリング・ユーザーの指定	20
メインフレーム情報の提供	21
「チューニング」ページ	23
Hashed File キャッシング	23
行バッファリング	23
「パラレル」ページ	24
「シーケンス」ページ	25
「リモート」ページ	25
USS システムにデプロイ	25
リモート・システムにデプロイ	28
「ログ」ページ	29
ジョブ・ログ・ファイルのパーズ	29
運用リポジトリのロギングを有効にする	30
第 5 章 プロジェクトの NLS の構成	31
プロジェクト・マップの変更	31
サーバー・ジョブのプロジェクト・マップ	32
パラレル・ジョブのプロジェクト・マップ	32
プロジェクト・ロケールの変更	32
サーバー・ジョブのロケール	32
パラレル・ジョブ・ロケール	33
クライアントおよびサーバーのマップ	34
製品のアクセシビリティ	35
製品資料	37
他社の Web サイトへのリンク	39
特記事項および商標	41
IBM の窓口	45
索引	47

第 1 章 アドミニストレーター・クライアントとは?

IBM® InfoSphere™ DataStage® アドミニストレーター・クライアントを使用して、単一 InfoSphere DataStage 上にある個々のプロジェクトの管理用タスクを実行します。

アドミニストレーター・クライアントは、Web クライアント・ベースのスイート・アドミニストレーターに応じて存在します。「スイート・アドミニストレーター」ハイパーリンクをクリックすることによって、アドミニストレーターの内部からスイート・アドミニストレーターを開くことができます。

誰がアドミニストレーターを使用できるか?

アドミニストレーター・クライアントのすべての機能を使用するには、スイート・アドミニストレーター内にアドミニストレーターとしてセットアップされている必要があります。

(InfoSphere DataStage ユーザーとしてセットアップされている場合は、アドミニストレーターを開くことができ、情報を表示して、管理機能以外の特定の機能を実行できます。)

アドミニストレーター・クライアントから実行できることは?

アドミニストレーター・クライアントでは、以下のタスクを実行できます。

- InfoSphere DataStage プロジェクトの追加、削除、および移動 (プロジェクト管理を参照)
- プロジェクトのユーザー許可のセットアップ (プロジェクト・プロパティを参照)
- ジョブ・ログ・ファイルのページ (プロジェクト・プロパティを参照)
- InfoSphere DataStage エンジンのタイムアウト間隔の設定 (アドミニストレーターの使用を参照)
- InfoSphere Information Server エンジン・アクティビティのトレース (プロジェクト・プロパティを参照)
- ジョブ・パラメーターのデフォルトの設定 (プロジェクト・プロパティを参照)
- アドミニストレーター・クライアントからの InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行 (アドミニストレーターの使用を参照)
- ライセンス詳細の確認 (アドミニストレーターの使用を参照)

これらのタスクはすべて、個々の InfoSphere Information Server エンジンのインストールに関連します。

第 2 章 アドミニストレーター・クライアントの使用法

以下のトピックでは、アドミニストレーターの開始方法と基本的なタスクの実行方法を説明し、高度なタスクの詳細情報がどこに記載されているかを示します。

アドミニストレーター・クライアントの開始

手順

1. 「スタート」メニューから、「IBM InfoSphere Information Server」 > 「IBM InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター」を選択します。
2. 管理する InfoSphere Information Server エンジンが属するサービス層のホスト名を指定します。
3. 管理する InfoSphere Information Server エンジンが存在するコンピューターのホスト名を選択します。
4. 指定されたドメインに接続するための「ユーザー名」と「パスワード」を指定します。すべてのアドミニストレーター・クライアント機能を使用するには、Web コンソールの「アドミニストレーター」タブで、DataStage アドミニストレーターとしてユーザーを指定しておく必要があります。
5. 「OK」をクリックします。

アドミニストレーター・クライアントの説明

アドミニストレーターには、3 つのタブ付きページがあります。

- 「全般」ページを使用して、エンジン全体のプロパティを設定します。このページは、少なくとも 1 つのプロジェクトが存在する場合にのみ使用できます。エンジン全体のプロパティは、次のとおりです。
 - 無応答タイムアウト (InfoSphere Information Server エンジン・タイムアウトの設定を参照)。
 - NLS クライアント/サーバー・マップ (このシステムで NLS が使用可能である場合) (クライアント/サーバー・マップを参照)。
- 「プロジェクト」ページには、InfoSphere Information Server エンジンが現在認識しているすべての InfoSphere DataStage プロジェクトがリストされています。このページを使用して、プロジェクトを管理します。ここから、次のことができます。
 - プロジェクトの追加と削除 (プロジェクト管理を参照)
 - プロジェクト・プロパティの表示と設定 (プロジェクト・プロパティを参照)
 - プロジェクトのデフォルトの文字セット・マップとロケールの変更 (NLS が使用可能である場合) (NLS の構成を参照)
 - InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを直接プロジェクトに発行する (InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行を参照)

プロジェクトが存在しなければ、「追加...」と「コマンド」ボタンのみが使用可能で、「コマンド」は InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを InfoSphere Information Server エンジン・アカウントに対して発行します。

InfoSphere Information Server エンジンのタイムアウトの設定

デフォルトの IBM InfoSphere Information Server エンジンのタイムアウト値を変更できます。

このタスクについて

デフォルトでは、InfoSphere DataStage クライアントと、Windows 上の InfoSphere Information Server エンジンとの接続は、86400 秒間 (24 時間) 無応答が続くとタイムアウトします。デフォルトでは、InfoSphere DataStage クライアントと、UNIX 上の InfoSphere Information Server エンジンとの接続はタイムアウトしません。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウで、「全般」タブをクリックして、「全般」ページを画面の前面に出します。
2. 「無応答タイムアウト」領域で、上矢印または下矢印ボタンをクリックしてタイムアウト時間を変更します。または、「秒」フィールドに新しいタイムアウト時間を入力します。
3. 無応答タイムアウトをしないようにするには、「タイムアウトしない」チェック・ボックスを選択します。
4. 「適用」をクリックして、新しい設定値を適用します。変更は、新規クライアント接続で即時に有効になります。

タスクの結果

アドミニストレーターの起動時に無応答タイムアウトが無効になっていた場合は、再び有効にするとデフォルトの 86400 秒に戻ります。

タイムアウトは、コマンド・ラインから発行される `dsjob -wait` コマンド、およびジョブ制御 API 関数 `DSWaitForJob` にも影響します。これらの機能を使用する場合は、タイムアウトを長く設定するか、タイムアウトを完全に無効にすることをお勧めします。また、タイムアウトはパラレル・キャンバスの共有コンテナにも影響します (`DSWaitForJob` を使用するため)。

アドミニストレーター・クライアントで設定されたタイムアウトは、IBM InfoSphere Information Server Web コンソールで設定されたセッション・タイムアウトをオーバーライドします。InfoSphere DataStage クライアントとエンジン間の接続は、Web コンソールで設定されたセッション・タイムアウトには影響されません。

InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの発行

以下の手順に従って、アドミニストレーター・クライアントから InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを発行できます。

このタスクについて

アドミニストレーター・クライアントを使用すれば、Telnet セッションを使用しないで、選択したプロジェクトから直接 InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを発行できます。

InfoSphere Information Server エンジン・コマンドの LOGOUT、LO、QUIT、Q、OFF は、クライアントからは発行できません。

システムの NLS 設定を操作する InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを発行するときは十分注意してください。これらのコマンドを誤って使用すると、InfoSphere DataStage およびシステムのその他の部分に混乱が生じるおそれがあります。

手順

1. 「DataStage アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「コマンド」をクリックします。「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 実行する InfoSphere Information Server エンジン・コマンドを「コマンド」フィールドに直接入力するか、「コマンド履歴」リスト・ボックスのコマンドをダブルクリックします。コマンド履歴から選択したコマンドは「コマンド」フィールドに表示され、そこで編集できます。
5. 「実行」をクリックします。コマンドが「コマンド履歴」リスト・ボックスに追加され、「コマンド出力」ウィンドウにコマンドの結果が表示されます。

コマンド出力は、最初のページの終わりで一時停止します。「次へ」をクリックすると、出力の次のページへスクロールします。ページングの設定をオフに切り替えるには、「コマンド出力」ダイアログ・ボックスの下部にある「ページ終端で出力を一時停止」チェック・ボックスの選択を外します。

6. コマンドにさらに入力が必要な場合は、「コマンド出力」ウィンドウに入力を求めるプロンプトが表示されます。コマンド出力表示の下にあるフィールドに応答を入力して、「応答」をクリックします。
7. コマンドの実行が完了したら、「閉じる」をクリックします。このウィンドウが閉じて、「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックスが再表示されません。
8. InfoSphere Information Server エンジンの VOC ファイルにコマンドを保存する場合は、「コマンド履歴」リスト・ボックスから 1 つ以上のコマンドを選択し、「名前を付けて保存...」をクリックします。単一のコマンドは文として、複数のコマンドは段落として保存されます。文または段落の名前を「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスに入力し、「OK」をクリックします。

それ自体に対する呼び出しを含む文や段落は保存できません。

9. 「閉じる」をクリックして、「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックスを閉じます。

第 3 章 プロジェクトの管理

以下のトピックでは、次の処理の実行方法を説明します。

- 新規 InfoSphere DataStage プロジェクトの追加
- プロジェクトの削除
- プロジェクトの移動

InfoSphere DataStage プロジェクトを削除する際は、確実にライセンス情報が正しく更新されるように、必ずアドミニストレーター・クライアントを介して実行してください。

プロジェクトの追加

必要に応じて、アドミニストレーター・クライアントからさらにプロジェクトを追加できます。

このタスクについて

新規プロジェクトを追加するときに、新規プロジェクトが既存のプロジェクトからユーザーとユーザーに関連付けられたロールを継承するように指定できます。

また、新規プロジェクトのプロテクトも指定できます。これはプロジェクトの特別カテゴリであり、通常はプロジェクト内での追加、削除、変更はできません。ユーザーはプロジェクト内のオブジェクトを表示でき、ジョブのデザインではなくジョブの実行方法に影響を与えるタスクを実行できます。具体的には次のことができます。

- ジョブの実行
- ジョブ・プロパティの設定
- ジョブ・パラメーターのデフォルト値の設定

新しく作成したプロテクトされたプロジェクトは、作成されたジョブおよびコンポーネントをインポートすると設定されます。このインポートを実行できるのは製品マネージャー・ロール、またはアドミニストレーター・ロールを持つユーザーのみで、それ以外のタイプのユーザーは特別なプロジェクトへのインポートはできません。(既存のプロジェクトをプロテクトするには、「プロジェクト・プロパティ」ダイアログ・ボックスを使用します。プロジェクトのプロテクトを参照してください。)

プロジェクトをプロテクトすると、「実動」環境下で実行予定のジョブ、すなわち完了したジョブの整合性を維持できます。製品マネージャー・ロールまたはアドミニストレーター・ロールに幅広いアクセスを認めると、プロジェクトをプロテクトすることで得られるメリットがなくなります。

プロジェクトを追加するための InfoSphere DataStage アドミニストレーター・ロールに加えて、管理している InfoSphere Information Server エンジンが存在している

コンピューターに関して、正しいオペレーティング・システム・アクセス権も必要です。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. 「追加...」ボタンをクリックします。「プロジェクトの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. プロジェクト名を「名前」フィールドに入力します。入力した名前は、新しいプロジェクトのデフォルトの場所に自動的に付加されます。

既に存在する場所にプロジェクトを追加することはできません。

4. デフォルトの場所を変更するには、「ホスト上の場所」フィールドに新しい場所を入力するか、「参照...」ボタンをクリックして新しい場所を選択します。
5. プロジェクトをプロテクトされたプロジェクトにする場合は、「プロテクトされたプロジェクトを作成」チェック・ボックスを選択します。
6. 新規プロジェクトにアクセスできるユーザーとそのユーザーのロールを既存のプロジェクトからコピーする場合、「既存のプロジェクトからロールをコピーする」を選択したあと、コピー元のプロジェクトをリストから選択します。
7. 「OK」をクリックします。

プロジェクトの削除

手順

1. 削除するプロジェクトに接続しているユーザーがないことを確認してください。別のユーザーが接続しているプロジェクトを削除しようとすると、InfoSphere DataStage からエラー・メッセージが返されます。
2. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
3. 削除するプロジェクトを選択して、「削除」をクリックします。
4. 削除の確認を求めるメッセージが表示されます。確認すると、プロジェクトは直ちに削除されます。

プロジェクトの移動

InfoSphere DataStage プロジェクトを移動するには、まずそのプロジェクトをファイルにエクスポートしてから、新しい場所にインポートする必要があります。

その後、アドミニストレーター・クライアントを使用して、元のプロジェクトを削除する必要があります。

この方法でプロジェクトを移動する前に、そのプロジェクト内のジョブが実行中でないことを確認してください。これを行うための最も簡単な方法は、InfoSphere DataStage ディレクターを開始し、移動するプロジェクトにアタッチして、現在実行中のジョブがないかどうかチェックすることです。

プロジェクトを移動するときに、環境変数設定やプロジェクト・オプションといったプロジェクト・レベルの設定は、含まれません。

プロジェクトの移動

InfoSphere DataStage プロジェクトを新しい場所に移動します。

手順

1. デザイナー・クライアントを開始して、移動するプロジェクトにアタッチします。
2. メインメニューから「**エクスポート**」 > 「**DataStage コンポーネント**」をクリックします。「リポジトリ・エクスポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「**すべて選択**」ハイパーリンクをクリックして、リポジトリ・ツリーのすべてのオブジェクトを選択します。
4. ドロップダウン・リストから、「**ジョブ・デザインと実行可能ファイルのエクスポート (該当がある場合)**」をクリックします。
5. 「**オプション**」ボタンをクリックして、「エクスポート・オプション」ダイアログ・ボックスを開きます。「**デフォルト**」 > 「**全般**」ブランチで、次を指定します。
 - ソース・コードがエクスポートされたルーチンに含まれることを指定する。
 - ソース・コードがジョブ実行可能ファイルに含まれることを指定する。
 - ソースの内容がデータ品質仕様に含まれることを指定する。
6. 「**エクスポート・タイプ**」として「**dsx**」を選択します。
7. エクスポート先のファイルを指定するか選択します。ファイルが存在する場合、「**ビュー**」ボタンをクリックしてそのファイルを表示します。ファイルは、Windows で指定された、このファイル・タイプのデフォルト・ビューアー、または、「エクスポート・オプション」ダイアログ・ボックスで指定されたビューアーで表示されます。
8. 「**エクスポート**」をクリックして、指定されたファイルにプロジェクトをエクスポートします。
9. 既存のプロジェクトを移動したい場所に、必要な名前新しいプロジェクトを作成します (この説明は、プロジェクトの追加を参照してください)。
10. 作成した新しいプロジェクトにデザイナー・クライアントをアタッチします。
11. 「**インポート**」 > 「**DataStage コンポーネント...**」を選択します。「DataStage リポジトリ・インポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
12. エクスポートされたプロジェクトに使用したファイル名を入力します。
13. 「**すべてインポート**」オプションをクリックし、「**OK**」をクリックします。プロジェクトがインポートされます。

第 4 章 プロジェクト・プロパティの設定

特定のプロジェクト・プロパティを表示し、変更することができます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、「プロジェクト」ページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」ボタンをクリックします。「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウが表示されます。

タスクの結果

「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウの各ページを使用して、次のことができます。

- 「全般」。ディレクター・クライアントからのジョブ管理の有効化、パラレル・ジョブのランタイム列伝搬の有効化、プロジェクト全体のジョブ・ログの自動ページ設定の定義、環境変数の設定、コネクタ・インポート・ウィザードを使用したインポート時のメタデータの自動共有の有効化、およびオペレーショナル・メタデータの生成などを行います。
- 「許可」。InfoSphere DataStage ユーザー・ロールを表示したり、それらのユーザー・ロールを特定プロジェクトのユーザーおよびグループに割り当てます。スイート・ユーザー・ロールの割り当ては、IBM InfoSphere Information Server Web コンソールで行います。
- 「トレース」。InfoSphere Information Server エンジンのトレースの有効/無効を切り替えることができます。
- 「スケジュール」。スケジューリングされた InfoSphere DataStage ジョブの実行に使用するユーザー名とパスワードをセットアップします。「スケジュール」タブは、Windows サーバーにログオンした場合にのみ表示されます。
- 「メインフレーム」。メインフレーム・ジョブ・プロパティとデフォルト・プラットフォーム・タイプを設定します。このページは、メインフレーム・エディションがインストールされている場合にのみ表示されます。
- 「チューニング」。Hashed File ステージのキャッシュ設定を構成します。
- 「パラレル」。日時および数字フォーマットに関する、パラレル・ジョブのプロパティとデフォルトを設定します。
- 「シーケンス」。ジョブ・シーケンスのコンパイルのデフォルトを設定します。
- 「リモート」。プロジェクトのパラレル・ジョブを USS システムにデプロイするように指定した場合に、デプロイメント・モードおよび USS マシンの詳細を指定します。

「全般」 ページ

「全般」 ページを使用して、選択したプロジェクトのさまざまな機能を制御します。

ディレクター・クライアントでのジョブ管理の有効化

アドミニストレーターは、アドミニストレーター・クライアントから、ディレクター・クライアントでのジョブ管理機能を有効にしたり無効にできます。

このタスクについて

これらの機能は、InfoSphere DataStage オペレーターに中断したジョブやハングしたジョブのリソースを解放させ、問題の原因が解決したらジョブを再実行可能な状況に戻します。デフォルトでは、これらの機能は無効になっています。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックします。「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウが現れ、「全般」ページが表示されます。
4. 「ディレクターでのジョブ管理を有効にする」チェック・ボックスを選択します。
5. 「OK」をクリックします。

タスクの結果

この手順を実行することによって、ディレクターの「ジョブ」メニューで 2 つのコマンドが使用可能になります。

- リソースのクリーンアップ
- 状況ファイルの消去

「リソースのクリーンアップ」は、ディレクターの「モニター」ウィンドウのショートカット・メニューでも使用可能になります。「リソースのクリーンアップ」によって次のことができます。

- ジョブ・プロセスの表示と終了
- 関連するロックの表示と解除

「リソースのクリーンアップ」は、トレースとは互換性がありません (InfoSphere DataStage エンジンでのトレースの有効化を参照)。サーバー・トレースとジョブ管理を有効に設定した場合、「リソースのクリーンアップ」を選択すると、ディレクターはエラー・メッセージを表示します。

「状況ファイルの消去」を実行すると、選択したジョブのすべてのステージに関連する状況レコードが削除されます。したがって、ジョブ処理がまったく存在しないこと、またジョブが正しくリセットできないことが確実な場合にのみ実行してください。

これら 2 つのコマンドを使用すると、ユーザーはジョブ・リソースに対して多くの制御権を得てしまいます。使用する際は十分注意してください。

これらのコマンドの使用法の完全な情報は、「*InfoSphere DataStage* デイレクター・クライアント・ガイド」を参照してください。

パラレル・ジョブのランタイム列伝搬を有効にする

この機能を有効にすると、パラレル・ジョブ内のステージでは、ジョブ実行時に遭遇する未定義列を処理し、これらの列をジョブの残りの部分に伝搬できます。

このタスクについて

このチェック・ボックスを選択するとランタイム列伝搬機能が有効になりますが、実際に使用するには、各ステージでオプションを明示的に選択する必要があります（「*InfoSphere DataStage* パラレル・ジョブ開発者ガイド」を参照）。この機能を有効にすると、次のサブプロパティーが利用できるようになります。

- **新規リンクのランタイム列伝搬を許可。** これを選択すると、新しいリンクを *InfoSphere DataStage* ジョブに追加する際にデフォルトでランタイム列伝搬が有効になります。選択しなかった場合は、ジョブのデザイン時に、ステージ・エディターのリンクごとにランタイム列伝搬を有効にする必要があります。

内部参照情報の編集の有効化

ステージ・エディターの列定義にある「表定義参照」フィールドと「列定義参照」フィールドの編集ができるようにするには、「ジョブでの内部参照の編集を許可」を選択します。

このタスクについて

これらの設定で、デザイナー・クライアントにおけるステージ・エディターの動作が決定されます。

これら 2 つのフィールドは、表定義、およびその表定義からロードされた個々の列を示します。これらのフィールドは、デザイナー・クライアントの「グリッド・プロパティー」ダイアログ・ボックスで各種設定を指定した時に、ステージ・エディターの「列」タブで有効になります。

コネクタからのメタデータのインポートの制御

「コネクタからインポートしたメタデータを共有」オプションを使用して、デザイナー・クライアントを使用してコネクタを通してメタデータをインポートするときに作成するオブジェクトを指定します。

このタスクについて

このオプションはデフォルトで選択されます。つまり、デザイナー・クライアントの中で「表定義のインポート」 > 「コネクタ・インポート・ウィザードの開始」コマンドを使用すると、表定義オブジェクトがプロジェクト内に、データ・コレクションが動的リポジトリ内に作成されます。その結果、他の *Suite* コンポーネントと他の *DataStage* プロジェクトは、動的リポジトリ内の *Data Collection* にアクセスできます。このオプションはデフォルトで選択されます。オプションが選択さ

れていなければ、プロジェクト・リポジトリの表定義オブジェクトのみが作成されます。

プロジェクトのプロテクト

製品マネージャーまたはアドミニストレーターのユーザーである場合、プロジェクトをプロテクト・プロジェクトに変更することができます。

このタスクについて

プロテクト・プロジェクトは、プロジェクトの特別なカテゴリーであり、通常は、プロジェクト内での追加、削除、変更はできません。

現在、UNIX システムでは、root または管理ユーザーのみがプロジェクトをプロテクトまたはプロテクト解除できます。

ユーザーはプロジェクト内のオブジェクトを表示でき、ジョブのデザインではなくジョブの実行方法に影響を与えるタスクを実行できます。

- ジョブの実行
- ジョブ・プロパティの設定
- ジョブ・パラメーターのデフォルト値の設定

製品マネージャー・ステータスのユーザーとアドミニストレーター・ステータスのユーザーは、既存の InfoSphere DataStage コンポーネントをプロテクトされたプロジェクトにインポートできます。

現在のプロジェクトをプロテクトされたプロジェクトに変換するには、「**プロジェクトをプロテクト**」ボタンをクリックします。変換の確認を求めるダイアログ・ボックスが表示されます。「OK」をクリックして続行します。「**プロジェクトをプロテクト**」ボタンは、「**プロテクトを解除**」ボタンに変わり、必要に応じて、プロジェクトをプロテクトされていない状態に戻すことができます。

プロジェクトがプロテクトされた後、そのプロテクトを解除できるのは、製品マネージャーまたは管理者ユーザー (UNIX の root または管理ユーザー) のみです。オペレーターは、プロテクト・プロジェクトの環境変数を追加および修正することができます。

アドミニストレーター・クライアントでは、プロテクトされたプロジェクトは、プロジェクト名の後ろに「(プロテクト)」というストリングを付けて識別されます。

環境変数の設定

このページから、プロジェクト全体に対する一般的な環境変数のデフォルトやパラレル・ジョブに固有の環境変数を設定できます。

手順

- 新しい変数を指定することもできます。これらの変数すべてはジョブで使用できるようになります。ジョブ・パラメーターと同じ方法でジョブに追加されます (「InfoSphere DataStage デザイナー・クライアント・ガイド」を参照してください)。

- 環境変数を定義するには、「**環境...**」ボタンをクリックします。「環境変数」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - 左のペインのツリーから、デフォルトを設定する環境変数のタイプを選択します。使用できる変数のリストが右のペインに現れます。「**値**」列で、変数の新しい値を選択できます。
 - 新しい変数を定義するには、「**ユーザー定義**」を選択します。変数の名前とデフォルト値を指定するためのダイアログ・ボックスが表示されます。また、ユーザー定義変数のタイプも設定できます。ストリング (デフォルト) または暗号化のどちらかを選択します。暗号化を選択すると、次に表示されるダイアログ・ボックスで暗号化ストリング値の入力と確認が求められます。
 - プロジェクトからファイルに環境変数をエクスポートするには、「**エクスポート**」をクリックします。『環境変数のエクスポート』を参照してください。
 - ファイルから環境変数をインポートするには、「**インポート**」をクリックします。 16 ページの『環境変数のインポート』を参照してください。
 - 選択した環境変数に、インストールされているデフォルト値を設定する場合は「**デフォルトに設定**」をクリックします。
 - 現在表示されているすべての環境変数に、インストールされているデフォルト値を設定する場合は「**すべてデフォルト**」をクリックします。
 - 選択した変数のヘルプ情報を取得する場合は「**変数のヘルプ**」をクリックします。

環境変数の設定を変更すると、プロジェクト内のすべてのジョブが影響を受けます。特定のジョブの環境変数を変更する場合は、「**値**」列を空にし、ジョブ・パラメーターを使用して環境変数の設定値を指定します (「*InfoSphere DataStage デザイナー・クライアント・ガイド*」を参照してください)。

環境変数のエクスポート

IBM InfoSphere DataStage and QualityStage™ アドミニストレーター・クライアントの「プロジェクト」ページからファイル (*.env) に、環境変数をエクスポートできます。このファイルを使用して、ファイルから他のプロジェクトに環境変数をインポートすることができます。

手順

1. InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター・クライアントを開きます。
2. 「プロジェクト」ページで、環境変数のエクスポート元のプロジェクトを選択し、「**プロパティ**」をクリックして「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを開きます。
3. 「全般」ページで、「**環境**」をクリックします。
4. 「環境変数」ダイアログで、「**エクスポート先ファイル**」をクリックします。
5. 「環境変数のエクスポート」ダイアログの、プロジェクト内のすべての環境変数が示されたツリー構造で、エクスポートする環境変数のチェック・ボックスを選択します。
6. 「**エクスポート**」ボタンをクリックします。

7. 環境変数をエクスポートする場所を尋ねるプロンプトが出されたら、エクスポート先のクライアントのパスを選択し、ファイル名を指定します。デフォルトのファイル名は `<project_name>.env` です。「保存」をクリックします。

環境変数のインポート

あるファイルの環境変数をプロジェクトにインポートすることができます。次に、インポートした環境変数をそのプロジェクト内のすべてのジョブに適用できます。

このタスクについて

あるプロジェクトの環境変数の値を変更またはインポートすると、その環境変数を使用するプロジェクトのすべてのジョブに新規のプロジェクト設定を適用できます。

環境変数をインポートする場合、次の規則がプロジェクト設定に適用されます。

- 同じ名前と同じ値を持つ環境変数の場合、アクションは行われません。
- 既存の環境変数と異なる名前を持つ環境変数の場合、プロンプトなしでインポートが実行されます。
- 名前が同じで値が異なる環境変数が既に存在する場合、値を上書きするかどうかを尋ねるプロンプトが出されます。

手順

1. InfoSphere DataStage and QualityStage アドミニストレーター・クライアントを開きます。
2. 「プロジェクト」ページで、環境変数のインポート先のプロジェクトを選択し、「プロパティ」をクリックして「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを開きます。
3. 「全般」ページで、「環境」をクリックします。
4. 「環境変数」ダイアログで、「インポート元ファイル」をクリックします。
5. プロンプトが出されたら、使用する環境変数ファイル (*.env) へのパスを指定します。
6. 「環境変数のインポート」ダイアログの、ファイル内のすべての環境変数とその値が示されたツリー構造で、インポートする環境変数のチェック・ボックスを選択します。
7. 「インポート」をクリックして、選択した環境変数をインポートします。
8. インポートの完了時に表示されるレポートで、作成された環境変数、上書きされた環境変数、または影響を受けない環境変数のサマリーを確認します。「詳細」をクリックすると、展開されたインポート結果レポートが表示されます。この展開されたレポートには、予期されたフォーマットと一致しないために解析できなかった、ファイルのすべての行の情報も含まれます。

認識可能な環境変数定義がない場合、インポートは、ファイルに認識可能な環境変数定義がないことを示すメッセージを返します。

プロジェクト・レベルでのオペレーショナル・メタデータの有効化 (パラレル・ジョブおよびサーバー・ジョブ)

アドミニストレーター・クライアントで「オペレーショナル・メタデータを生成」を選択すると、IBM InfoSphere DataStage and QualityStage のサーバー・ジョブとパラレル・ジョブのオペレーショナル・メタデータをプロジェクト・レベルで使用可能にできます。

このタスクについて

プロジェクトでジョブを実行すると、ジョブ実行と影響を与えるデータウェアハウス・リソースを記述したメタデータが収集されます。次に、実行インポーター・ユーティリティを使用して、このオペレーショナル・メタデータをリポジトリにインポートできます。それを IBM Metadata Workbench で分析して、Web コンソールでそのレポートを表示できます。

ディレクター・クライアントでは、個々のジョブのプロジェクト・レベルの設定をオーバーライドできます。

オペレーショナル・メタデータの詳細については、「*IBM InfoSphere Information Server* オペレーショナル・メタデータ管理ガイド」を参照してください。

「許可」 ページ

以下のトピックでは、InfoSphere DataStage ユーザー・ロールと、これらのロールのユーザーまたはグループへの割り当てを変更する方法を説明します。

ユーザーは、スイート・アドミニストレーター・ツールの中で、DataStage アドミニストレーターまたは DataStage ユーザーとして定義されると、InfoSphere DataStage にアクセスできるようになります。DataStage アドミニストレーターとして、DataStage ユーザーがプロジェクトにアクセスできるかどうか、またアクセスできる場合は、どのカテゴリーのアクセスができるかを定義できます。

また、スイート・アドミニストレーター・ツールを使用して、グループの追加、およびユーザーのグループへの割り当てを行うことができます。これらのグループにも、DataStage アドミニストレーターまたは DataStage ユーザーのロールが割り振られます。管理者グループに属するユーザーは、InfoSphere DataStage を管理できるようになります。DataStage アドミニストレーターとして、DataStage ユーザー・グループにプロジェクトへのアクセス権を付与し、ロールをグループに割り当てることができます。

ユーザーとグループを設定する際、これらのユーザーとグループには、プロジェクトが存在するフォルダーにアクセスするために、オペレーティング・システム・レベルでの適切な許可も必要です。InfoSphere DataStage クライアントを使用するためには、これらのクライアントがインストールされた Windows コンピューターの管理ユーザーでもある必要があります。

また、このセクションでは、DataStage オペレーターまたは DataStage スーパー・オペレーターのロールを持つユーザーのジョブ・ログのエントリーのデフォルト・ビューを変更する方法についても説明します。

「許可」ページには、次の制御が含まれます。

- 「**ロール**」。このウィンドウには、現在、このプロジェクトに対するアクセス許可を持っているすべてのユーザーとグループが、そのロールと共にリストされます。このウィンドウには、スイート・アドミニストレーター・ツールの中で DataStage アドミニストレーターとして定義されたユーザーが常に含まれ、そのようなユーザーをリストから削除したり、ユーザー・ロールを変更したりすることはできないことに注意してください。
- 「**ユーザー・ロール**」。このリストには、割り当てることができる 4 つの InfoSphere DataStage ユーザー・カテゴリが含まれます。リストから 1 つを選択し、それを、現在「ロール」ウィンドウで選択されているユーザーに割り当てます。
- 「**ユーザーまたはグループの追加**」。これをクリックすると、「ロール」ウィンドウにリストされたユーザーまたはグループに新規のユーザーまたはグループを追加するための「ユーザー/グループの追加」ダイアログ・ボックスが開きます。
- 「**削除**」。これをクリックすると、「ロール」ウィンドウにリストされたユーザーまたはグループから、選択されたユーザーまたはグループが削除されます。
- 「**DataStage オペレーターにすべてのログの参照を許可**」。このチェック・ボックスはデフォルトで選択済みになっています。その場合、InfoSphere DataStage オペレーターは、エラー・メッセージと、ジョブ・ログ・ファイルの中のエントリーに関連付けられたデータの両方を見ることができます。オペレーターがログ・ファイル・エントリーのデータ・パーツを見ることができないようにするには、このチェック・ボックスをクリアします。そうすると、データへのアクセスは、開発者ロール以上を持つユーザーに制限されます。

プロジェクトのユーザー、グループ、およびロールを割り当てたあと、このプロジェクトを新規プロジェクトを追加するときのテンプレートとして使用できます。新規プロジェクトを追加するたびに処理を繰り返す必要がないように、新規プロジェクトは、プロジェクトからユーザー、グループ、およびロールを継承できます。

InfoSphere DataStage ユーザー・ロール

InfoSphere DataStage プロジェクトへの無許可アクセスを防止するには、システムの InfoSphere DataStage ユーザーまたはグループに、適切な InfoSphere DataStage ユーザー・ロールを割り当てる必要があります。

次の 4 つの InfoSphere DataStage ユーザー・ロールがあります。

- DataStage 開発者。DataStage プロジェクトのすべての領域にフル・アクセスできます (プロテクトされたプロジェクトを除く)。
- DataStage 製品マネージャー。DataStage プロジェクトのすべての領域にフル・アクセスでき、プロテクトされたプロジェクトの作成と操作もできます。(現在、UNIX システムでは、製品マネージャーは、プロジェクトをプロテクトまたはプロテクト解除をするには、root または管理ユーザーでなければなりません。)
- DataStage オペレーター。DataStage ジョブの実行と管理の権限を持ちます。オペレーターは、プロテクト・プロジェクトの環境変数を追加および修正することができます。
- DataStage スーパー・オペレーター。DataStage ジョブの実行と管理の権限を持ち、デザイナー内の項目を表示する権限を持ちます (編集はできません)。

InfoSphere DataStage ユーザー・ロールの割り当て

アドミニストレーター・クライアントで、InfoSphere DataStage ユーザーおよびグループを表示できます。スイート・ユーザー・ロールの割り当ては IBM InfoSphere Information Server Web コンソール で行います。

手順

1. 「許可」 ページを開きます。
2. 「アドミニストレーター」 ウィンドウの「プロジェクト」 タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
3. プロジェクトを選択します。
4. 「プロパティ」 をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」 ウィンドウを表示します。
5. 「許可」 タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。 デフォルトで、この「許可」 タブには、Web コンソールの「管理」 タブで、DataStage アドミニストレーターとして定義されたすべてのユーザーまたはグループが表示されます。このようなユーザーは、このプロジェクトについて、DataStage アドミニストレーター・ロールのアクセスを自動的に持ちます。このアクセス権を、「ユーザー・ロール」 ドロップダウン・リストおよび「削除」 ボタンを使用して削除することはできません。この両方とも使用できません。
6. InfoSphere DataStage ユーザーを追加するには、次のようにします。
 - a. Web コンソールを開きます。
 - b. 「ナビゲーション」 ペインで、「ユーザーとグループ」 をクリックします。
 - c. 「ユーザー」 をクリックします。
 - d. ユーザーを割り当てるには、Web コンソール・ヘルプの指示に従います。
7. 以前にこのプロジェクトに追加した InfoSphere DataStage ユーザーまたはグループを除去するには、次のようにします。
 - a. Web コンソールの「管理」 タブで、「ユーザー」 表の中からユーザーを選択します。
 - b. 「タスク」 ペインで「削除」 をクリックします。

オペレーターに対するジョブ・ログ・エントリーの表示の変更

ジョブ・ログ・ファイルのエントリーは、エラー・メッセージとエラーに関連するデータで構成されています。

このタスクについて

デフォルトでは、DataStage オペレーターまたはスーパー・オペレーターがイベントの詳細を表示する際に、IBM InfoSphere DataStage and QualityStage ディレクター・クライアントおよびデザイナー・クライアントではメッセージとデータの両方が表示されます。この設定を変更してエラー・メッセージだけがオペレーターに表示されるようにするには、「許可」 ページで「DataStage オペレーターにすべてのログの参照を許可」 チェック・ボックスの選択を解除して、「OK」 をクリックします。これで、関連するデータへのアクセスは、開発者権限を持つユーザーに限定されるようになります。

InfoSphere Information Server エンジンでのトレースの有効化

InfoSphere Information Server エンジンのアクティビティーをトレースして、プロジェクトの問題点の診断に利用できます。

このタスクについて

デフォルトでは、トレースは無効になっています。トレースを有効にすると、プロジェクトにアタッチするあらゆるクライアントのエンジン・アクティビティーについての情報が記録されます。この情報はトレース・ファイルに書き込まれます。システム・ソフトウェアについて詳細な知識があれば、トレース・ファイルはクライアントでの問題の原因を判断する場合に役立ちます。

トレースが有効である場合、InfoSphere DataStage クライアントを開始すると必ず警告メッセージが表示されます。

トレースは、アドミニストレーター・クライアントからも有効にできるジョブ管理コマンド「リソースのクリーンアップ」とは互換性がありません。詳細は、ディレクター・クライアントでのジョブ管理の有効化を参照してください。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを表示します。
4. 「トレース」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
5. 「サーバー側トレース機能」領域の「有効」オプション・ボタンをクリックします。
6. 「OK」をクリックして、トレースをアクティブにします。クライアントがプロジェクトにアタッチすると必ず「トレース」ページの「トレース・ファイル」リスト・ボックスにトレース・ファイルが追加されます。
7. トレース・ファイルを表示するには、「トレース・ファイル」リスト・ボックスでファイル名をダブルクリックするか、ファイル名を選択して「ビュー」ボタンをクリックします。「トレース・ファイルの表示」ウィンドウに、トレース・ファイルが表示されます。トレース情報をクリップボードにコピーするには、「トレース・ファイルの表示」ウィンドウでテキストを選択して、「コピー」をクリックします。
8. トレース・ファイルを削除するには、「トレース・ファイル」リスト・ボックスで 1 つ以上のファイル名を選択してから、「削除」ボタンをクリックします。

スケジューリング・ユーザーの指定

エンジンの実行場所が Windows コンピューターの場合、InfoSphere DataStage は、Windows スケジュール・サービスを使用してジョブをスケジュールします。

このタスクについて

このため、デフォルトでは、ジョブはスケジュール・サービスのユーザー名で実行されます。スケジュール・サービスのユーザーは、デフォルトでは、NT システム権限者に設定されています。場合によっては、NT システム権限に、ジョブを実行するために必要な十分な権限がないことがあります。この問題を解決するため、次の手順に従って、プロジェクトのスケジュール済みジョブを実行するユーザー名を定義できます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを表示します。
4. 「スケジュール」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
5. 使用したいユーザー名とパスワードを入力して、スケジュール済みジョブを実行します。
6. 「テスト」をクリックして、ユーザー名とパスワードが正常に使用できるかをテストします。これには、InfoSphere Information Server エンジン上でのコマンドのスケジューリングと実行も含まれるため、テスト完了まで、しばらく時間がかかることがあります。
7. 「OK」をクリックして、ユーザー名とパスワードを保存します。

メインフレーム情報の提供

メインフレーム・ジョブがデザイナーからメインフレーム・コンピューターへアップロードされる時に、JCL スクリプトもアップロードされます。メインフレーム・ジョブ・プロパティを定義し、デフォルト・プラットフォーム・タイプを指定する必要があります。

このタスクについて

スクリプトは、メインフレーム・ジョブがコンパイルされる時に必要な情報を提供します。メインフレーム・ジョブをサポートするプロジェクトについては、このスクリプトに含めるメインフレーム・ジョブ・プロパティを定義する必要があります。また、デフォルトのプラットフォーム・タイプを設定する必要があります。このプラットフォーム・タイプは、メインフレーム・ルーチンのような新しいオブジェクトがデザイナーで作成されるときにデフォルトです。このページでは、フラット・ファイルでの NULL の定義方法の詳細も指定できます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. メインフレーム・ジョブをサポートするプロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックして、「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウを表示します。

4. 「メインフレーム」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。

「メインフレーム」タブは、選択したプロジェクトがメインフレーム・ジョブをサポートする場合のみ表示されます。

5. 「日付形式」ドロップダウン・リストから、プロジェクトのデフォルトの日付形式を選択します。(プロジェクトのデフォルトは、デザイナー・クライアントの「ジョブ・プロパティ」ダイアログ・ボックスで、ジョブ・レベルでオーバーライドできます。)
6. 「プラットフォーム・タイプ」リストから、プラットフォームのタイプを選択します。
7. データベース・システム名、ユーザー名、およびパスワードを入力します。
8. 選択したプラットフォームに対するデフォルトの最大ブロック・サイズと最大ブロック係数を変更する場合は、「最大ブロック係数」フィールドと「最大ブロック・サイズ」フィールドに新しい値を入力します。

(OS/390® プラットフォームでは、最大ブロック係数として 1 から 32767 までの値を設定できます。最大ブロック・サイズには、0、または 4096 から 32767 までの値を設定できます。0 を指定すると、オペレーティング・システムが最適なブロック・サイズを設定します。)

9. 選択されたプラットフォームをデフォルトと設定するには、「デフォルトに設定」ボタンをクリックします。プラットフォーム・タイプの後ろの括弧の中に「デフォルト」が表示されます。
10. 「式のセマンティック・チェックを実行」を選択すると、デフォルトで、プロジェクトのすべてのメインフレーム・ジョブの式エディターでセマンティック・チェックが実行されます。この設定は、必要に応じて、ジョブ・レベルで変更できます。
11. 「拡張 10 進数をサポート」を選択して、ジョブ内のプロジェクトでの拡張 10 進タイプの使用を有効にします。「最大 10 進数サイズ」フィールドが有効になります。
12. 「オペレーショナル・メタデータを生成」を選択すると、デフォルトで、プロジェクトのメインフレーム・ジョブのオペレーショナル・メタデータが生成されます。この設定は、必要に応じて、ジョブ・レベルで変更できます。
13. 「拡張 10 進数をサポート」を選択した場合、プロジェクトのメインフレーム・ジョブで使用するメタデータの「長さ」フィールドに指定できる最大値を「最大 10 進数サイズ」フィールドに入力してください。設定できる値は 18 (デフォルト) または 31 です。
14. 「NULL インジケータの位置」ドロップダウン・リストから、「列の前」または「列の後」を選択して、メインフレーム列定義における NULL インジケータの位置を指定します。
15. 「NULL インジケータ値」フィールドに、メインフレーム列定義の NULL 可能性を示すための文字を指定します。NULL インジケータは、1 バイトの印刷可能文字でなければなりません。次のいずれかを指定します。
 - 1 文字の値 (1 がデフォルトです)
 - 3 桁の 10 進数で表した ASCII コード。範囲は 000 から 255 までです。

- %Hnn または %hnn の 16 進形式の ASCII コード。nn は、16 進数字 (0 から 9、a から f、A から F) です。
16. 「非 NULL インジケータ値」フィールドに、メインフレーム・フラット・ファイルでの非 NULL 列定義を示すための文字を指定します。NULL インジケータは、1 バイトの印刷可能文字でなければなりません。次のいずれかを指定します。
- 1 文字の値 (0 がデフォルトです)
 - 3 桁の 10 進数で表した ASCII コード。範囲は 000 から 255 までです。
 - %Hnn または %hnn の 16 進形式の ASCII コード。nn は、16 進数字 (0 から 9、a から f、A から F) です。
17. 「OK」をクリックして、変更を保存します。

「チューニング」ページ

「チューニング」ページでは、Hashed File ステージでのキャッシュの詳細設定と、サーバー・ジョブのパフォーマンスを向上させるための行バッファの設定を行います。

Hashed File キャッシング

Hashed File ステージがレコードをハッシュ・ファイルに書き込むとき、すぐにハッシュ・ファイルに書き込まずに、書き込みをキャッシュするオプションがあります。

このタスクについて

同様に、Hashed File ステージがハッシュ・ファイルを読み取るときに、ハッシュ・ファイルをメモリーにプリロードするオプションがあります。このオプションを使用すると、以降のアクセスを非常に高速にし、ファイルが Transformer ステージに対する参照リンクを提供するときに使用されます。(UniData[®] ステージにも、ファイルをメモリーにプリロードするオプションがあります。この場合、同じキャッシュ・サイズが使用されます。)

「チューニング」ページの「Hashed File ステージ」領域で、読み取りキャッシュ・サイズと書き込みキャッシュ・サイズを設定します。

手順

1. 読み取りキャッシュ・サイズを指定するには、「読み取りキャッシュ・サイズ (MB)」フィールドに、0 から 999 の値を入力します。値はメガバイト単位で指定し、デフォルトは 128 です。
2. 書き込みキャッシュ・サイズを指定するには、「書き込みキャッシュ・サイズ (MB)」フィールドに、0 から 999 の値を入力します。値はメガバイト単位で指定し、デフォルトは 128 です。
3. 「OK」をクリックして、変更を保存します。

行バッファリング

行バッファリングを使用すると、サーバー・ジョブのパフォーマンスを大きく向上させることができます。

この機能をプロジェクト全体に対して有効にするには、「行バッファを有効にする」チェック・ボックスを選択します。

次の 2 種類の相互排他的な行バッファリングがあります。

- **プロセス内。** プロセス内行バッファリングをオンにし、ジョブをリコンパイルすると、ほとんどのジョブのパフォーマンスを改善できます。これによって、接続されているアクティブ・ステージは、行単位ではなく、バッファ経由でデータを渡せます。
- **プロセス間。** SMP パラレル・システム上でサーバー・ジョブを実行する場合に使用します。これによって、ジョブは、アクティブ・ステージごとに別々のプロセスを使用して実行されます。各アクティブ・ステージは別々のプロセッサで同時に実行されます。

ステージ間のデータのやり取りに変換処理関数の **COMMON** ブロックを使用するようにジョブを作成すると、どちらの行バッファリングも使用できません。この方法はお勧めしません。 **COMMON** ブロックではなく行バッファリングを使用するようにジョブを再設計することをお勧めします。

行バッファリングを有効にすると、次の項目を指定できます。

- **バッファ・サイズ。** プロセス内またはプロセス間行バッファリングで使用するバッファのサイズを指定します。デフォルトは 128 KB です。
- **タイムアウト。** プロセス間の行バッファリングを使用するときのみ適用されます。1 プロセスがバッファ経由で他プロセスと通信する場合のタイムアウトとなるまでの待ち時間を指定します。デフォルトは 10 秒です。

「パラレル」 ページ

「パラレル」 ページを使用すると、プロジェクト内のパラレル・ジョブに特定のデフォルトを指定できます。

「すべてのプロジェクトでパラレル・ジョブの生成 OSH を可視にする」オプションを選択すると、デザイナーとディレクターの次に示すさまざまなポイントで、パラレル・ジョブが生成するコードを参照できます。

- パラレル・ジョブの「ジョブ・プロパティ」ダイアログ・ボックス
- ジョブ実行ログ・メッセージ
- デザイナーでデータ参照機能を使用したとき
- 「表定義」ダイアログ・ボックス

このオプションを選択すると、現在選択されているプロジェクトだけではなく、すべてのプロジェクトで、この機能が有効になることに注意してください。

Orchestrate® を使い慣れたユーザーであれば、「パラレル・ジョブのための高度なランタイム・オプション」フィールドに、OSH コマンド・ラインに追加するパラメータを入力することもできます。通常は、ブランクのままにしておきます。このフィールドを使用して、`-nosortinsertion` オプションまたは `-nopartinsertion` オプションを指定できます。これらのオプションを指定すると、InfoSphere DataStage が必要と判断した場所にソート処理またはパーティション化処理を自動挿入することがなくなります。これは、プロジェクト内のすべてのジョブに適用されます。

「**パラレル・ジョブのメッセージ・ハンドラー**」では、プロジェクトのすべてのパラレル・ジョブで使用するメッセージ・ハンドラーを指定できます。メッセージ・ハンドラーの定義は、ディレクターで行います。メッセージ・ハンドラーは、パラレル・ジョブで生成される警告メッセージまたは情報メッセージの処理方法を指定します。ドロップダウン・リストから、定義済みのハンドラーを 1 つ選択します。

「**フォーマット・デフォルト**」領域を指定すると、日付、時刻、タイム・スタンプ、小数点のシステム・デフォルト・フォーマットをオーバーライドできます。デフォルトを変更するには、対応する「**システム・デフォルト**」チェック・ボックスを選択解除して、ドロップダウン・リストから新しいフォーマットを選択するか、新しいフォーマットを入力します。

「シーケンス」 ページ

このページを使用して、ジョブ・シーケンスのコンパイルのデフォルトを設定します。オプションで、InfoSphere DataStage がジョブ・シーケンスにチェックポイントを追加するように設定できます。チェックポイントを追加しておけば、シーケンスの一部が失敗した場合に最初から再実行する必要がなくなります。

問題を修正して、失敗したポイントからシーケンスを再実行できます。また、シーケンスの実行中に失敗したジョブを、InfoSphere DataStage が自動処理するように指定できます (つまり、失敗したジョブ用のトリガーが不要になります)。

残りのオプションを選択すると、警告または致命的エラーで終了したり、コマンドまたはルーチンがエラーで終了したりするようなジョブの実行時に、ジョブ・シーケンスがデフォルトでシーケンス・ログにメッセージを記録するように指定できます。また、ジョブの実行終了後すぐにジョブの状況報告書がログに記録されるように設定できます。

「リモート」 ページ

このページを使用して、次のどちらを行うのかを指定できます。

- 実行するパラレル・ジョブを、USS システムにデプロイする。あるいは
- 実行するパラレル・ジョブを、デプロイメント・プラットフォーム (例えば、グリッド内のシステム) にデプロイする。

USS システムにデプロイ

パラレル・ジョブを USS システムにデプロイする場合、このページでデプロイメントの詳細を指定できます。

以下の詳細を指定できます。

- デプロイメントのモード。
- デプロイ先の USS マシンの詳細情報 (この情報は、ファイルの送信、およびリモート・シェルの実行に使用されます)。
- USS マシン上でコマンドを実行するために使用されるリモート・シェルの詳細。
- USS マシンのデプロイメント・ファイルの場所。

このページには、次のフィールドが含まれます。

- **スタンドアロン・パラレル・ジョブ・スクリプトをデプロイ**。スタンドアロン方式のデプロイメントを使用する場合に選択するオプションです。これは、InfoSphere DataStage ではなく、ユーザーが USS マシンでパラレル・ジョブを実行することを意味します。スタンドアロン方式だけを選択して、ターゲット・マシンの詳細を指定しない場合、スクリプト・ファイルの転送および許可の設定を適切に行う必要があります。
- **DataStage の制御下でジョブを実行**。ディレクターから USS マシン上のジョブを実行する場合に選択するオプションです。InfoSphere DataStage は、ページ内のその他のフィールドで設定した詳細情報を使用して、必要なファイルを USS マシンに FTP 転送し、リモート・シェルを介して実行します。

必要に応じて、この両方のオプションを同時に選択できます。同時に選択すると、ファイルが自動で送信されて許可が設定されてから、ユーザーがディレクターを介してファイルを実行するか、USS マシン上で直接実行するかを選択できます。

ターゲット・マシンの詳細情報は、次のフィールドで指定します。

- **名前**。ジョブをデプロイする USS マシンの名前。「DataStage の制御下でジョブを実行」を選択した場合に指定する必要があります。「スタンドアロン・パラレル・ジョブ・スクリプトをデプロイ」だけを選択している場合に名前を指定すると、InfoSphere DataStage は、指定されたマシンにファイルを FTP 転送しようとすることに注意してください。指定するマシンは InfoSphere Information Server エンジンが存在するマシンからアクセスできなければなりません (クライアントからアクセスできるだけでは不十分です)。
- **ユーザー名**。ファイルを USS マシンに転送する場合に使用するユーザー名。リモート・シェル・テンプレートでユーザー名を使用するように設定されている場合は、リモート・シェルでも使用されます。
- **パスワード**。ユーザー名のパスワード。リモート・シェル・テンプレートでユーザー名を使用するように設定されている場合は、リモート・シェルでも使用されます。
- **リモート・シェル・テンプレート**。転送されたファイルの実行許可の設定と、デプロイされたジョブをデザイナーから実行する場合のリモート・シェルの詳細を設定します。テンプレートの形式は次のとおりです。

```
rshellcommand options tokens
```

例を示します。

```
rsh -l %u %h %c
```

トークンを使用すると、コマンドの特定のオプションに対して現行値を指定できます。使用できるトークンは次のとおりです。

- %h - ホスト
- %u - ユーザー名
- %p - パスワード
- %c - リモート・ホストで実行されるコマンド

「DataStage の制御下でジョブを実行」を選択した場合は、リモート・シェルの詳細を指定する必要があります。「スタンドアロン・パラレル・ジョブ・スクリ

「**プトをデプロイ**」のみを選択した場合は、InfoSphere DataStage は、設定されている任意のリモート・シェル・テンプレートをを使用して、転送されたジョブのデプロイメント・ファイルに必要な許可を設定し、そのほかのハウスキーピング・タスクを実行します。リモート・シェルの実行にユーザー名とパスワードをこのようにテンプレートで指定すると、セキュリティの面で心配な場合もあります。別の方法としては、USS マシンでユーザー出口を指定して、リモート・シェルの使用を許可するユーザーを明示的に判別する方法があります。

USS マシンのデプロイメント・ファイルの場所は次のフィールドで設定します。

- **ベース・ディレクトリー名。** USS マシンのベース・ディレクトリーを指定します。指定したディレクトリー名に USS プロジェクトの名前を続けて、プロジェクトのホーム・ディレクトリーを表します。各ジョブはホーム・ディレクトリー下の個々のディレクトリーに保存されます。相対パス名ではなく、フルパス名(絶対パス名)で指定してください。
- **デプロイされるジョブ・ディレクトリー・テンプレート。** 各ジョブのデプロイメント・ディレクトリーに別の名前を指定できます (オプション)。デフォルトでは、ジョブのディレクトリーに「RT_SC*jobnum*」という名前が付けられます。*jobnum* は、InfoSphere DataStage によって割り振られるジョブの内部番号です。例えば、ベース・ディレクトリーとして「/u/cat1/remote」を指定し、プロジェクト名が「USSproj」の場合、ジョブのディレクトリーには次のような名前が付けられます。

```
/u/cat1/remote/USSproj/RT_SC101 /u/cat1/remote/USSproj/RT_SC42  
/u/cat1/remote/USSproj/RT_SC1958
```

テンプレートを使用すると、ジョブのディレクトリー名を別の形式で指定できます。次のトークンが提供されています。

- %j - ジョブ名
- %d - 内部番号

必要に応じて、トークンの前にテキストを付けることも可能です。例えば、次のようなテンプレートを指定したとします。

```
job_%d
```

例にあるジョブ・ディレクトリーは、次のようになります。

```
/u/cat1/remote/USSproj/job_101 /u/cat1/remote/USSproj/job_42 /u/cat1/remote/USSproj/  
job_1958
```

ディレクトリー名にジョブ名を使用する場合は、次に示す予約語をジョブ名に使用しないでください。

- buildop
- wrapped
- wrapper
- **カスタム・デプロイメント・コマンド。** 必要であれば、スタンドアロン方式のデプロイメントが指定されたプロジェクト内のジョブをコンパイルしたあとで実行する処理を指定できます。これらの処理は通常 InfoSphere Information Server エンジン・マシンで実行されますが、FTP を有効にしている場合 (ターゲット・マ

シン領域で FTP 接続の詳細を指定してある場合) は、USS マシンで実行されま
す。どちらの場合にも、作業ディレクトリーにジョブのデプロイメント・ファイ
ルが格納されます。次のトークンを使用できます。

- %j - ジョブ名
- %d - 内部番号

この機能は、例えば、USS マシンにデプロイするファイルを tar ファイルにまと
める場合などに使用します。

```
tar -cvf ../%j.tar *
```

この設定では、デプロイするジョブが「jobname.tar」という名前の tar アーカイ
ブにまとめられます。

リモート・システムにデプロイ

パラレル・ジョブのリモート・デプロイメントを指定できます。

このタスクについて

パラレル・ジョブをそのほかのデプロイメント専用システムにデプロイする場合
は、このページで次を指定できます。

- デプロイメントの場所を指定する。
- デプロイメント・ディレクトリーの名前を指定する。
- デプロイメント・コンパイル終了後に実行されるアクションを指定する。

パラレル・ジョブのデプロイについて詳しくは、「*InfoSphere DataStage* パラレル・
ジョブ開発者ガイド」を参照してください。

手順

1. USS サポートのセクションに記載されたオプションは**選択しないでください**。
2. 「**ベース・ディレクトリー名**」フィールドに、デプロイメント用ホーム・ディレ
クトリーの場所を指定します。ホーム・ディレクトリーには、ジョブごとに 1
つのディレクトリーが存在します。InfoSphere Information Server エンジン・マ
シンからアクセスできる場所を指定する必要がありますが、そのマシンに対して
ローカルなディスクである必要はありません。場所を指定することによってジョ
ブ・デプロイメント機能が有効になります。
3. 「**デプロイされるジョブ・ディレクトリー・テンプレート**」フィールドには、必
要に応じて、特定のジョブに関連付けられたデプロイメント・ディレクトリーの
別名を指定します。このフィールドは、「**ベース・ディレクトリー名**」フィール
ドと一緒に指定します。名前が指定されていない場合、デフォルトでは、名前
は、InfoSphere Information Server エンジン・プロジェクト・ディレクトリーで
使用される内部スクリプト・ディレクトリー `RT_SCjobnum` に対応します。ここ
で、`jobnum` は、そのジョブに割り振られた内部ジョブ番号です。次の置換スト
リングを指定できます。

- %j - ジョブ名
- %d - 内部番号

最も簡単な形式は「%j」で、ジョブ名を使用します。接頭部を使用し、「job_%j」のように指定できます。デフォルトは、RT_SC%d に対応していません。

4. 「カスタム・デプロイメント・コマンド」フィールドでは、必要に応じて、デプロイメント・コンパイルの終了後に実行されるアクションを指定します。必要であれば、UNIX プログラムまたはユーザーのシェル・スクリプト呼び出し、あるいはその両方を指定できます。

このフィールドでは、ディレクトリー・テンプレートと同じ置換ストリングを使用します。例を示します。

```
tar -cvf ../%j.tar * ; compress ../%j.tar
```

この例では、デプロイされたジョブの圧縮 *.tar アーカイブ・ファイルがジョブと同じ名前で作成されます。

「ログ」 ページ

「ログ」 ページを使用して、プロジェクトの中のジョブの実行時に、そのジョブの情報がどのようにログに記録されるかを制御します。

ジョブ・ログ・ファイルのパーシ

すべての InfoSphere DataStage ジョブにログ・ファイルがあり、ジョブを実行するたびに新しいエントリーがログ・ファイルに追加されます。

このタスクについて

このファイルが大きくなり過ぎないようにするため、時々ログをパーシする必要があります。プロジェクト全体に対するデフォルト値を設定してジョブ・ログを自動的にパーシしたり、手動でログをパーシしたりできます。アドミニストレーター・クライアントのデフォルトを変更すると、新しい設定がプロジェクトのジョブに反映されます。ただし、ジョブがデフォルト設定をオーバーライドしている場合は別です (この設定はディレクター・クライアントから実行します)。この場合、オーバーライドした値のままです。

プロジェクトの自動パーシを設定するには、次のようにします。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティー」をクリックします。「プロジェクト・プロパティー」ウィンドウが現れ、「全般」ページが表示されます。
4. 「ログ」タブをクリックします。
5. 「ログ」ページで「ジョブ・ログの自動パーシ」チェック・ボックスを選択します。
6. 自動パーシ・アクションを選択します。指定の日数を経過したジョブをパーシしたり、ログに残すジョブの数を指定したりできます。例えば、10 回分のジョブ実行を指定すると、最新の 10 回分のジョブ実行のエントリーが保持されます。

7. 「OK」をクリックして、自動ページ・ポリシーを設定します。自動ページはこのプロジェクト内で作成されるすべての新規ジョブに適用されます。「ログのページ」ウィンドウで既存のジョブに対する自動ページを設定することもできます。ディレクターからこのウィンドウにアクセスするには、「ジョブ」 > 「ログの消去...」を選択します。

タスクの結果

「ディレクター」ウィンドウで、「ジョブ」 > 「ログのページ...」を選択すると、ジョブごとにジョブ・ログの自動ページを設定できます。

運用リポジトリのロギングを有効にする

プロジェクトの中のジョブが、実行時にロギング情報を運用リポジトリに書き込むように指定できます。

このタスクについて

ジョブ・ログが運用リポジトリに書き込まれると、その情報は IBM InfoSphere Information Server スイートの他のコンポーネントが使用できます。例えば、InfoSphere Information Server Web コンソールの中でログ情報を見ることができます。運用リポジトリにロギング情報のサブセットのみが書き込まれるようにフィルターをセットアップできます。ジョブ実行によって生成されるほとんどのメッセージは、「情報」または「警告」メッセージです。残りのメッセージは、「開始」、「終了」、「リセット」、「リジェクト」、「異常終了」、および「致命的」メッセージです。運用リポジトリに送られるログ・メッセージの量を減らすために、含める「情報」および「警告」メッセージの最大数を指定できます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「プロパティ」をクリックします。「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウが開き、「全般」ページが表示されます。
4. 「ログ」タブを選択します。
5. 「ログ」ページで、「運用リポジトリのロギングを有効にする」を選択します。
6. オプション: 「1 回のジョブ実行で運用リポジトリに書き込まれる「情報」メッセージの最大数」を選択し、このオプションの値を設定します (デフォルト値は 10)。
7. オプション: 「1 回のジョブ実行で運用リポジトリに書き込まれる「警告」メッセージの最大数」を選択し、このオプションの値を設定します (デフォルト値は 10)。

第 5 章 プロジェクトの NLS の構成

IBM InfoSphere DataStage には、各国語サポート (NLS) が組み込まれています。

すなわち、InfoSphere DataStage は次の処理ができます。

- 多様な言語でのデータ処理
- 日付、時刻、通貨に対するローカル・フォーマットの使用
- ローカル・ルールに基づいたデータのソート

NLS を使用して、InfoSphere DataStage は、データを Unicode フォーマットで保持します。これは、世界中の言語で使用されている数多くの文字を含んだ国際標準文字セットです。InfoSphere DataStage は必要に応じて、Unicode フォーマットから、または Unicode フォーマットにデータをマッピングします。

各 InfoSphere DataStage プロジェクトには、インストール時に割り当てられたマップおよびロケールがあります。マップはプロジェクトが使用できる文字セットを定義します。ロケールは、プロジェクトがその地域で使用する日付、時刻、ソート順序など (ソート順序はパラレル・ジョブの場合のみ) のフォーマットを定義します。また、データが正しいフォーマットで転送されるように InfoSphere DataStage クライアントおよびサーバー・コンポーネントにもインストール時にマップが割り当てられています。

InfoSphere DataStage では、別々のメカニズムでサーバー・ジョブとパラレル・ジョブに NLS を設定するので、マップとロケールの詳細をジョブの 2 つのタイプとして別々に設定してください。通常の状態では、2 つの設定は一致します。

「アドミニストレーター」ウィンドウから、インストール時に割り当てられたマップやロケールをチェックし、必要に応じて変更できます。

プロジェクト・マップの変更

プロジェクト・マップを表示または変更することができます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「プロジェクト」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. プロジェクトを選択します。
3. 「NLS...」をクリックします。「プロジェクト NLS 設定」ウィンドウが表示されます。

「NLS...」ボタンがアクティブでない場合、NLS がインストールされていません。

4. サーバー・ジョブまたはパラレル・ジョブのプロジェクト・マップを設定するかどうかを選択し、これに応じて「サーバー・マップ」または「パラレル・マップ」タブを選択します。

サーバー・ジョブのプロジェクト・マップ

「デフォルト・マップ名」フィールドに、プロジェクトのサーバー・ジョブで使用する現在のマップが表示されます。

このタスクについて

デフォルトでは、InfoSphere DataStage にロードされ、使用可能なマップのみがリストに表示されます。「すべてのマップを表示」をクリックすると、InfoSphere DataStage に付属しているすべてのマップ・リストを確認できます。

プロジェクトのデフォルト・マップ名を変更するには、使用するマップ名をクリックして、「OK」をクリックします。

マップを InfoSphere DataStage にインストールするには、「インストール」をクリックします。「マップ」ページに追加のオプションが表示されます。

「利用可能」リストには、InfoSphere DataStage に付属するすべての文字セット・マップが表示されます。「インストール済み/ロード済み」リストには、現在インストールされているマップが表示されます。マップをインストールするには、「利用可能」リストからマップを選択し、「追加」をクリックします。このマップは、次のサーバーの再起動時に InfoSphere DataStage にロードされ、使用できるようになります。すぐにマップを使用する必要がある場合は、サーバー・エンジンを再起動してください。

インストールされているマップを削除するには、マップを「インストール済み/ロード済み」リストから選択して、「削除」をクリックします。このマップは次のサーバーのリブート時またはサーバー・エンジンの再起動時にアンロードされます。

パラレル・ジョブのプロジェクト・マップ

「デフォルト・マップ名」フィールドに、プロジェクトのパラレル・ジョブで使用する現在のマップが表示されます。

このタスクについて

リストには、InfoSphere DataStage にロードされ、使用可能なマップのみが表示されます。デフォルト・マップにするマップをダブルクリックします。

プロジェクト・ロケールの変更

デフォルトのプロジェクトのロケールを表示または変更するには、「プロジェクト NLS 設定」ウィンドウを開いて、状況に応じて、「サーバー・ロケール」タブまたは「パラレル・ロケール」タブを選択します。

サーバー・ジョブのロケール

このタスクについて

このページには、次の 5 つのカテゴリに分けられた、デフォルトのプロジェクト・ロケールを示すフィールドがあります。

- 「**時間/日付**」 - 日付と時間のフォーマットです。例えば、31 Dec 1999 と 12/31/99 は、別のロケールで使用される可能性のある同一日付を表す 2 つの方法です。
- 「**数値**」 - 数値に使用するフォーマットで、3 桁の区切り記号および小数点 (小数) を含みます。
- 「**通貨**」 - 通貨stringのフォーマットで、通貨記号 (\$、£、€、¥ など) の種類と位置を含みます。
- 「**文字タイプ**」 - 文字タイプのフォーマットです。これには各言語での大文字小文字で表記できる文字の定義も含まれます。
- 「**照合**」 - 各言語でのソート順序です。

デフォルトでは、ロード済みで使用可能なロケールのドロップダウン・リストが各フィールドに用意されています。各カテゴリーのロケールを変更するには、ドロップダウン・リストから目的のロケールを選択します。変更が終わったら、「**OK**」をクリックします。「**すべてのロケールの表示**」をクリックしてカテゴリーのドロップダウン・リストをクリックすると、InfoSphere DataStage に付属しているすべてのロケール・リストを確認できます。これらのロケールは、InfoSphere DataStage にインストールしてロードしておかなければ使用できません。

ロケールのインストールとロード

ロケールをインストールするには、「**インストール**」をクリックして、「ロケール」ページの詳細オプションを表示します。

このタスクについて

「**利用可能**」リストには、InfoSphere DataStage に付属するすべてのロケールが表示されます。「**インストール済み/ロード済み**」リストには、現在インストールされているロケールが表示されます。ロケールをインストールするには、「**利用可能**」リストからロケールを選択し、「**追加**」をクリックします。このロケールは、次のサーバー・エンジンの再起動時に InfoSphere DataStage にロードされ、使用できるようになります。ロケールを直ちに使用する場合は、サーバー・エンジンを再始動します。

インストールされているロケールを削除するには、「**インストール済み/ロード済み**」リストから目的のロケールを選択して、「**削除**」をクリックします。このロケールは次のサーバー・エンジンの再起動時にアンロードされます。

パラレル・ジョブ・ロケール

パラレル・ジョブでは照合カテゴリーのみを使用します。インストールされたロケールのドロップダウン・リストからロケールを選択します。

このタスクについて

「**参照**」ボタンを使用すると、他の照合シーケンスを定義するテキスト・ファイルを参照して指定できます。

クライアントおよびサーバーのマップ

InfoSphere Information Server エンジンのインストール時に、InfoSphere DataStage でサポートする言語を指定します。InfoSphere DataStage は、サーバーに指定された言語に合わせて、InfoSphere DataStage クライアントがサポートする言語を自動的に設定します。

このタスクについて

別のクライアントから InfoSphere Information Server エンジンにアクセスすると、クライアントとエンジン間でデータが正しくマッピングされない場合があります。データが確実に正しくマッピングされるようにするため、クライアント・マップの変更が必要になることがあります。次のステップを実行すると、現在のマッピングを表示できます。

手順

1. 「アドミニストレーター」ウィンドウの「全般」タブをクリックして、このページを画面の前面に出します。
2. 「NLS...」をクリックします。「通常 NLS の設定」ウィンドウが開きます。

タスクの結果

「**現行 ANSI コード・ページ**」フィールドは情報を参照するためのもので、これには、クライアントの現在の Microsoft コード・ページが含まれています。コード・ページは現在のプロジェクトやエンジンには依存しません。「**使用中のクライアント/サーバー・マップ**」フィールドは、エンジン・コンピューター上の現在のクライアント・セッションで使用されているマップ名を表示します。リストは、ロードされているすべてのマップを表示します。

マップを選択して、「**適用**」をクリックすると、InfoSphere DataStage は、表示されているコード・ページを使用して現行サーバーへ接続しているすべてのクライアントに対して、指定のマップの設定を試行します。マッピングがテストされ、不適切な場合は拒否される可能性があります。

InfoSphere DataStage へ新たなマップをインストールするには、「**インストール**」をクリックして「クライアント」ページに詳細オプションを表示します。

InfoSphere DataStage はクライアント/サーバー通信について、名前の終わりに「-CS」(クライアント/サーバー用) が付く特殊なマップを使用しています。クライアント/サーバー通信には常にこれらのマップのいずれかを選択してください。

「**利用可能**」リストには、InfoSphere DataStage に付属するすべての文字セット・マップが表示されます。「**インストール済み/ロード済み**」リストには、現在インストールされているマップが表示されます。マップをインストールするには、「**利用可能**」リストからマップを選択し、「**追加**」をクリックします。このマップは、次のサーバーの再起動時に InfoSphere DataStage へロードされ、使用できるようになります。マップを直ちに使用する場合は、サーバー・エンジンを再始動します。

インストールされているマップを削除するには、マップを「**インストール済み/ロード済み**」リストから選択して、「**削除**」をクリックします。このマップは次のサーバーのリポート時またはサーバー・エンジンの再起動時にアンロードされます。

製品のアクセシビリティ

IBM 製品のアクセシビリティ対応状況についての情報を入手できます。

IBM InfoSphere Information Server 製品のモジュールおよびユーザー・インターフェースは完全にはアクセシビリティ対応がなされていません。インストール・プログラムは、次の製品モジュールとコンポーネントをインストールします。

- IBM InfoSphere Business Glossary
- IBM InfoSphere Business Glossary Anywhere
- IBM InfoSphere DataStage
- IBM InfoSphere FastTrack
- IBM InfoSphere Information Analyzer
- IBM InfoSphere Information Services Director
- IBM InfoSphere Metadata Workbench
- IBM InfoSphere QualityStage

IBM 製品のアクセシビリティ対応状況の詳細は、http://www.ibm.com/able/product_accessibility/index.html をご覧ください。

アクセシビリティ対応資料

インフォメーション・センターには、InfoSphere Information Server 製品のアクセシビリティ対応資料が用意されています。インフォメーション・センターでは、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で資料を提供しています。XHTML により、使用しているブラウザに設定されている表示形式で資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーやその他の支援技術を使用して、資料にアクセスすることもできます。

IBM のアクセシビリティ

アクセシビリティに関する IBM のコミットメントについては、IBM Human Ability and Accessibility Center を参照してください。

製品資料

資料は、製品のクライアント・インターフェースから直接開くことができるヘルプ、スイート全体に渡るインフォメーション・センター、および PDF ファイルのブックなど、さまざまな場所および形式で提供されます。

以下の Web で最新情報を入手できます。

www.ibm.com/jp/software/data/ (日本語のサイト)

www.ibm.com//software/data/integration/info_server/ (英語のサイト)

インフォメーション・センターは、IBM InfoSphere Information Server に付属した共通サービスとしてインストールされます。インフォメーション・センターには、スイートのすべての製品モジュールの完全な資料だけでなく、ほとんどの製品インターフェースのヘルプも含まれています。インフォメーション・センターは、インストール済み製品から開くことも、Web ブラウザーから開くこともできます。

インフォメーション・センター

次の方法でインストール済みのインフォメーション・センターを開くことができます。

- クライアント・インターフェースで、画面右上の「ヘルプ」リンクをクリックします。

注: IBM InfoSphere FastTrack および IBM InfoSphere Information Server Manager から、メインのヘルプ項目がローカルのヘルプ・システムを開きます。「ヘルプ」>「インフォメーション・センターを開く」を選択して、全スイートのインフォメーション・センターを開きます。

- F1 キーを押します。F1 キーを押すと、通常、クライアント・インターフェースの現行コンテキストを説明するトピックが開きます。

注: F1 キーは、Web クライアントでは機能しません。

- 製品にログインしていないときでも、インストールされたインフォメーション・センターには Web ブラウザーを使用してアクセスできます。Web ブラウザーで、アドレス `http://host_name:port_number/infocenter/topic/com.ibm.swg.im.iis.productization.iisinfsv.home.doc/ic-homepage.html` を入力します。host_name はインフォメーション・センターがインストールされているサービス層コンピューターの名前で、port_number は InfoSphere Information Server のポート番号です。デフォルトのポート番号は 9080 です。例えば、「iisdocs2」という名前の Microsoft® Windows® Server コンピューターの場合、Web アドレスの形式は次のようになります。`http://iisdocs2:9080/infocenter/topic/com.ibm.swg.im.iis.productization.iisinfsv.nav.doc/dochome/iisinfsv_home.html`

インフォメーション・センターのサブセットも IBM Web サイトの `publib.boulder.ibm.com/infocenter/iisinfsv/v8r5/index.jsp` から利用可能で、これは適宜更新されます。

PDF およびハードコピー資料の入手

- PDF ファイルのブックは、InfoSphere Information Server ソフトウェア・インストーラーおよび配布メディアを通して利用可能です。PDF ファイル・ブックのサブセットもオンラインで www.ibm.com/support/docview.wss?rs=14&uid=swg27008803 から利用可能で、これは適宜更新されます。
- IBM 資料は、オンラインでダウンロード、または IBM 担当員を通じてご注文いただけます。資料をオンラインでダウンロードするには www.ibm.com/shop/publications/order の IBM Publications Center にアクセスしてください。

他社の Web サイトへのリンク

このインフォメーション・センターは、IBM 以外の Web サイトおよびリソースへのリンクまたは参照を含む場合があります。

IBM は、IBM Web サイトより参照もしくはアクセスできる、または IBM Web サイトにリンクされた Lenovo 社の Web サイトを含む IBM 以外の Web サイトもしくは第三者のリソースに対して一切の責任を負いません。IBM 以外の Web サイトにリンクが張られていることにより IBM が当該 Web サイトを推奨するものではなく、またその内容、使用もしくはサイトの所有者について IBM が責任を負うことを意味するものではありません。また、IBM は、お客様が IBM Web サイトから第三者の存在を知ることになった場合にも（もしくは、IBM Web サイトから第三者へのリンクを使用した場合にも）、お客様と第三者との間のいかなる取引に対しても一切責任を負いません。従って、お客様は、IBM が上記の外部サイトまたはリソースの利用について責任を負うものではなく、また、外部サイトまたはリソースからアクセス可能なコンテンツ、サービス、製品、またはその他の資料一切に対して IBM が責任を負うものではないことを承諾し、同意するものとします。

お客様が IBM 以外の Web サイトにアクセスされた場合、それが IBM ロゴを含んでいる場合でも、これらの Web サイトは、IBM から独立して運営されており、IBM は、当該 Web サイトの内容に関していかなる責任も負わないことをご了承ください。ウイルス、ワーム、トロイの木馬、およびその他の有害なプログラムに対する予防措置を講じること、およびお客様がしかるべき措置が必要であると考えた場合の情報の保護は、お客様の責任で講じていただきます。

特記事項および商標

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502
神奈川県大和市下鶴間1623番14号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003 U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、さまざまなオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布するこ

とができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは特定物として現存するまま提供し、法律上の瑕疵担保責任を含むいかなる保証責任も負いません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

IT Infrastructure Library は英国 Office of Government Commerce の一部である the Central Computer and Telecommunications Agency の登録商標です。

インテル、Intel、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Intel Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

ITIL は英国 Office of Government Commerce の登録商標および共同体登録商標であって、米国特許商標庁にて登録されています。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Cell Broadband Engine, Cell/B.E は、米国およびその他の国における Sony Computer Entertainment, Inc. の商標であり、同社の許諾を受けて使用しています。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

IBM の窓口

お客様サポート、ソフトウェア・サービス、製品情報、および全般情報について、IBM と連絡を取ることができます。また、製品についてのフィードバックを行うことができます。

次の表に、お客様サポート、ソフトウェア・サービス、研修、製品およびソリューション情報に関するリソースをリストしています。

表1. IBM リソース

リソース	説明と場所
IBM サポート・ポータル	サポート情報は、 www.ibm.com/support/entry/portal/Software/Information_Management/InfoSphere_Information_Server で、製品と関心のあるトピックを選択してカスタマイズできます。
ソフトウェア・サービス	ソフトウェア、IT、およびビジネス・コンサルティング・サービスについての情報は、「ソリューション」サイト www.ibm.com/businesssolutions/jp/ja にアクセスしてください。
My IBM	www.ibm.com/account/jp/ja/ の「My IBM」サイトでアカウントを作成し、特定のテクニカル・サポートのニーズに合うように、IBM Web サイトおよび情報へのリンクを管理できます。
研修と認定	個人、法人、および公共団体向けに、IT 技術の習得、維持、最適化を目的としてデザインされた技術研修およびサービスについては、 http://www.ibm.com/software/sw-training/ にアクセスしてください。
IBM 担当員	ソリューションについて IBM 担当員と連絡を取るには、 www.ibm.com/connect/ibm/us/en/ にアクセスしてください。

フィードバックの提供

次の表は、製品についてのフィードバックを行う方法を示しています。

表2. IBM へのフィードバックの提供

フィードバックの種類	操作
製品のフィードバック	www.ibm.com/software/data/info/consumability-survey の「Consumability Survey」を通して、全般的な製品のフィードバックを行うことができます。

索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アドミニストレーター 3
インストール
マップ 34
ロケール 33
ウィンドウ
コマンド出力 5
通常 NLS の設定 34
トレース・ファイルの表示 20
プロジェクト NLS 設定 31
プロジェクト・プロパティ 11
DataStage アドミニストレーター 3, 31
お客様サポート 45
オペレーショナル・メタデータ 17

[カ行]

各国語サポート、NLS を参照 31
環境変数
ファイルからのインポート 16
ファイルへのエクスポート 15
「許可」ページ 19
クライアントおよびサーバーのマップ 34
コード・ページ 34
コマンド
InfoSphere Information Server エンジン 5
「コマンド出力」ウィンドウ 5
「コマンド・インターフェース」ダイアログ・ボックス 5

[サ行]

サーバーのタイムアウト、設定 4
サーバーのトレース 20
サーバー・アクティビティのトレース 20
サポート
お客様 45
時間 33
自動ページ・デフォルト 29
「状況ファイルの消去」オプション 12
小数点 33

ジョブ
状況ファイルの消去 12
スケジューリング 21
ファイルのクリーンアップ 12
ログ・ファイル 29
ジョブ管理 12
ジョブのスケジューリング 21
ジョブ・プロパティ、メインフレーム 21
数値 33
スケジュール済みジョブのユーザー名のテスト 21
製品のアクセシビリティ
アクセシビリティ 35
設定
サーバーのタイムアウト 4
自動ページ・デフォルト 29
スケジュール済みジョブのユーザー名 21
メインフレーム・ジョブ・プロパティ 21
ソート順序 33
ソフトウェア・サービス 45

[タ行]

ダイアログ・ボックス
コマンド・インターフェース 5
プロジェクトの追加 8
DataStage リポジトリ・インポート 9
他社の Web サイト
リンク 39
追加
プロジェクト 7
通貨記号 33
「通常 NLS の設定」ウィンドウ 34
デプロイメント・システム 28
特記事項 41
「トレース・ファイルの表示」ウィンドウ 20

[ハ行]

ページ、自動 29
日付 33
表示
マップ 31
ロケール 32
ファイル
クリーンアップ 12

ファイル (続き)
トレース 20
ログ 29, 30
プロジェクト
移動 8
削除 8
追加 7
「プロジェクト NLS 設定」ウィンドウ 31
プロジェクトの移動 8
プロジェクトの削除 8
「プロジェクトの追加」ダイアログ・ボックス 8
「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウ 11
「プロジェクト・プロパティ」ウィンドウの「スケジュール」ページ 21
プロジェクト・プロパティの編集 11
プロパティ
プロジェクト 11
メインフレーム 21
変更
マップ 31
ロケール 32

[マ行]

マップ 31
インストール 34
クライアント およびサーバー 34
変更 31
メインフレーム・ジョブ・プロパティ、設定 21
メッセージ・ハンドラー 25
文字タイプ 33

[ヤ行]

ユーザー・ロール 18
有効化
サーバーのトレース 20
ディレクターでのジョブ管理 12

[ラ行]

「リソースのクリーンアップ」オプション 12
リモート・デプロイメント 28
ログ・ファイル
運用リポジトリ 30

ログ・ファイル (続き)
 オペレーターに対する表示の設定 19
 自動ページ 29
 手動ページ 30
ロケール 32
 インストール 33
 変更 32

[数字]

3 桁の区切り記号 33

D

「DataStage アドミニストレーター」ウィ
 ンドウ 31
 「全般」ページ 3
DataStage エンジンでのトレースの有効化
 20
DataStage ディレクター
 でのジョブ管理の有効化 12
DataStage ユーザーの設定 17, 18
 「DataStage リポジトリ・インポート」
 ダイアログ・ボックス 9
DataStage エンジンのトレース 20

I

InfoSphere Information Server エンジン
 コマンドの発行 5
InfoSphere Information Server エンジン・
 コマンドの発行 5

N

NLS オプション
 サーバー設定 34
 プロジェクト設定 31
NLS (各国語サポート)
 概要 31
 クライアントおよびサーバーのマップ
 34
 マップ 31
 ロケール 32
NT システム権限 21

U

Unicode 31
USS システム 25

W

Web コンソール
 「アドミニストレーター」タブ 3
Web サイト
 IBM 以外の 39
Windows スケジュール・サービス 21

Z

Z/OS システム 25



Printed in Japan

SA88-4530-00



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21